

# 1. 流域の自然状況

## 1.1 河川・流域の概要

おものがわ  
 雄物川は、その源を秋田・山形県境の大仙山  
 (標高 920m) に発し、奥羽山脈から発する  
 みなせがわ よこてがわ  
 皆瀬川、横手川等の支川を合わせながら横手盆  
 地を北上し、たまがわ  
 玉川を合流した後、進路を北西に  
 あきたしあらや  
 変え、秋田市新屋で旧雄物川を分派し、本川は  
 放水路を経て日本海に注ぎ、旧雄物川は秋田港  
 を経て日本海に注ぐ、幹川流路延長 133 km、流  
 域面積 4,710km<sup>2</sup>の一級河川である。

その流域は、秋田県の県都秋田市や大仙市  
 など 5 市 2 町 1 村からなり、流域の土地利用は  
 山林等が約 71%、水田や畑地等の農地が約  
 19%、宅地等の市街地が約 4%となっており、  
 特に水田は秋田県全体の約半分を占める有数  
 の穀倉地帯である。

表 1-1 雄物川流域の概要

項目	数値	備考	
流路延長	133km	全国第30位 東北第6位	
流域面積	4,710km <sup>2</sup>	全国第13位 東北第4位	
流域内	市 町 村	5市2町1村	平成19年8月
	流域内人口	約67万人	平成12年 河川現況調査



図 1-1 雄物川流域図

## 1. 流域の自然状況

### 1.2 地形

雄物川は、北東部には秋田駒ヶ岳（1,637m）、焼山（1,366m）などの火山があり、地形も急峻であり、奥羽山脈と出羽山地に囲まれた流域を上流域とし、その地形は上流山間地域、横手盆地、玉川合流点より秋田平野にいたる狭窄部、秋田平野の4つの部分からなる。横手盆地は南北に長く広がるが、その表面傾斜は東から西に傾いており、奥羽山脈から流れる皆瀬川、横手川など支川から流出する土砂の堆積作用により、雄物川の流れを西側に変えてきた。

西部は出羽山地の低標高部で、いずれの支川も流路は短い。

玉川合流後の雄物川は、出羽山地を切り開く先行谷となり、侵食作用による河道の湾曲や、河道の片側が断崖となっていて続いている。秋田平野に出ると、本川は秋田市南西部の新屋付近で人工的に開削された放水路から日本海へ注いでいるが、元は秋田市の西方において海岸砂丘に出口を閉ざされながら、土崎港において日本海へ注いだものである。



図 1-2 雄物川流域図

1.3 地質

雄物川流域の地質は、第3紀層の凝灰岩が主体であり、ほとんどが中新世及び鮮新世のものである。この第3紀層の基盤をなすのが古生層で、諸処に鉱山があった。北東部の玉川流域は秋田駒ヶ岳・焼山等八幡平山系の火山からの溶岩が流れ出したことにはじまり、第4紀安山岩類及び凝灰岩等から形成されており、川沿いの山腹では風化が進んでいる。また、中下流部に位置する横手盆地及び秋田平野の大部分は沖積層からなっている。

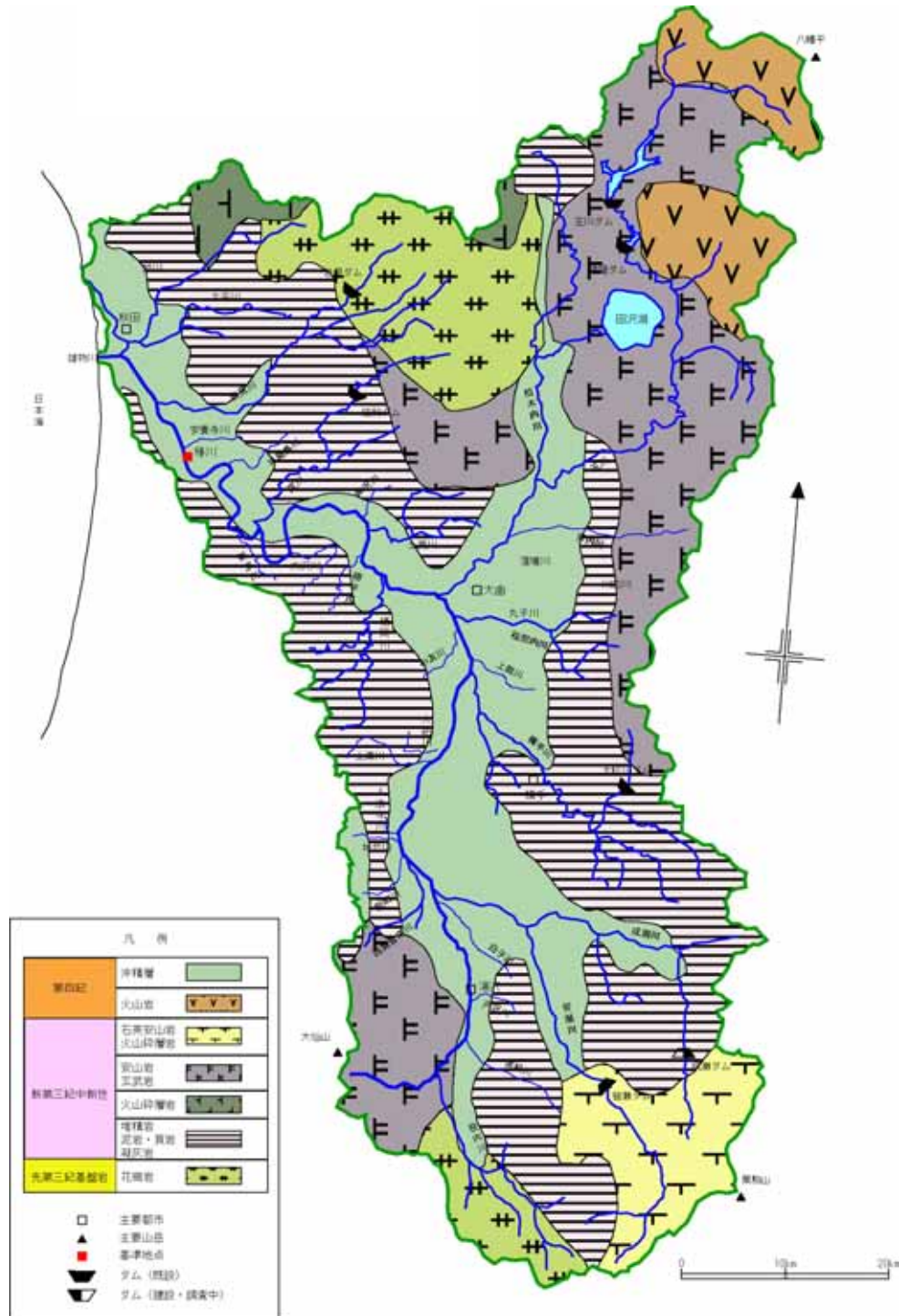
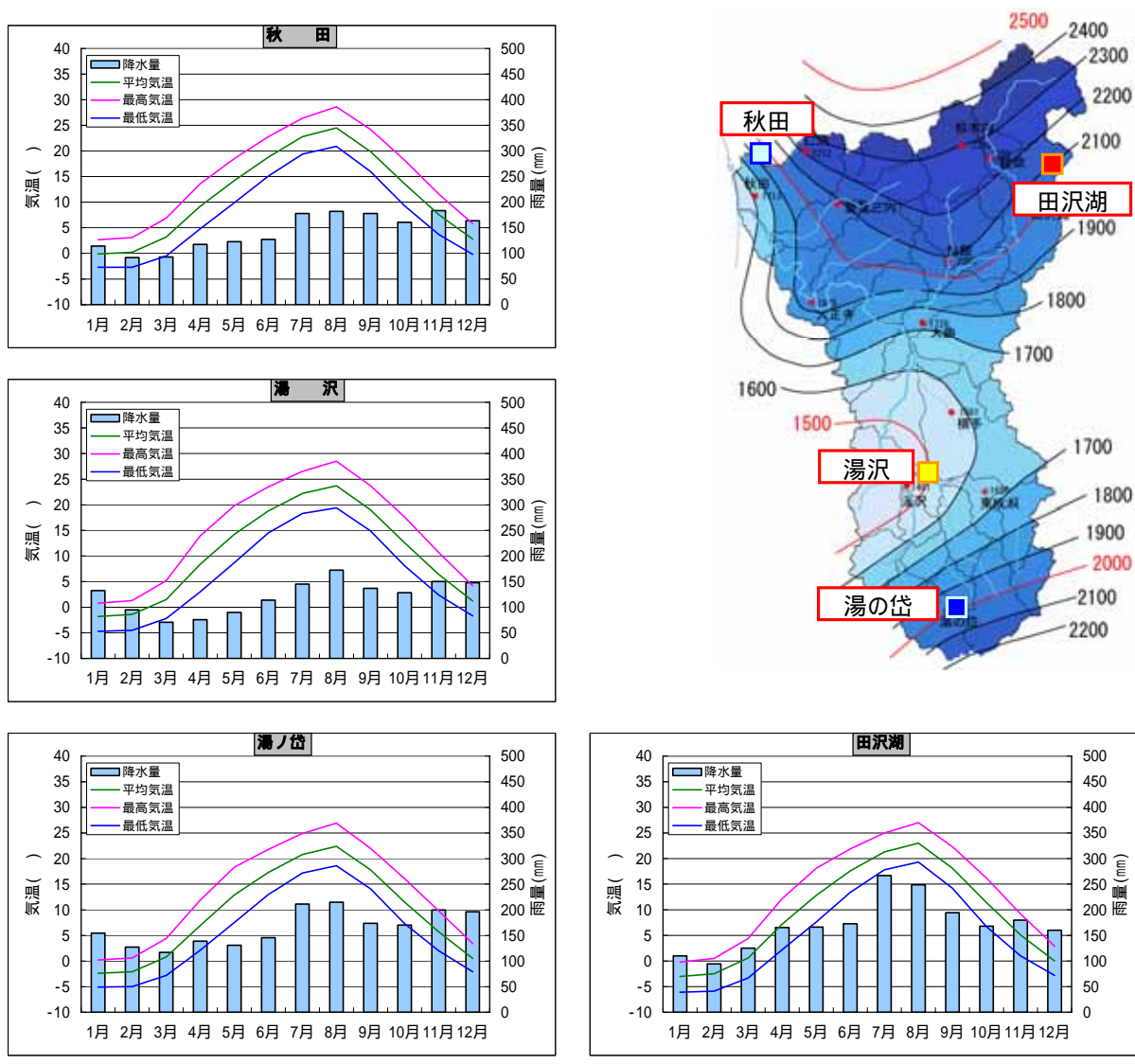


図 1-3 雄物川流域 地質図

# 1. 流域の自然状況

## 1.4 気候・気象

雄物川流域内の気候は、冬季の積雪寒冷を特徴とする日本海性の気候で、年間降水量は平野部 1,500mm～1,700mm 程度、山地部約 2,000～2,300mm 程度となっており、約 40%が冬季の降雪である。降雨の原因としては、前線性のものが多く、流域内では標高が高い地域で降雨が多くなる傾向となっている。



平年値:秋田、1971-2000その他1979-2000

気象庁HP 気象統計情報 過去の気象データより作成

図 1-4 各地の年平均気温・降水量および年間平均総降水量分布図